

論文要旨

【学位論文題目】 「大正期日本における G.V.ローシーの活動と背景

：世紀転換期西欧のバレエ文化とその移入」

【氏名】 山田小夜歌

【要旨】

本研究は、大正期日本の帝国劇場（以下、帝劇）に招聘されたバレエ教師・振付家・演出家ジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシー Giovanni Vittorio Rosi（1867.10.21-1940.4.7?）（以下、ローシー）について、来日以前の芸歴および評価と日本滞在中の活動の内実を解明し、それらの影響関係に着目して検討することによって、ローシーが西欧で体得したバレエとはどのようなものだったのか、またそのバレエの日本への移入はいかなるかたちで試みられたのか、その様相を明らかにすることを目的とする。

これまでローシーについては、日本で初めて「正統」にして「本格的」なバレエを教え、洋舞発祥の種を蒔いた先駆的人物であるという肯定的な評価の一方で、日本におけるバレエ発展への永続的な貢献に至らなかったことが度々指摘されてきた。こうしたローシーの評価には、「正統」「本格的」という、フランスからロシアをなぞった一般的な「バレエ正統史」、あるいはバレエに関する現在の理解を投影した概念が大きく影響している。しかし、イタリア出身で英国ロンドンを中心に活動したローシーが体得したバレエは、フランスやロシアの「正統的バレエ」とは作品、上演実態の違いはもとより、その背景や社会的・文化的意味においても相当の隔たりがあるものと推察される。

そこで本研究では、ローシー自身が来日前に体得したバレエ、すなわち 19 世紀末から 20 世紀初頭のイタリアや英国ロンドンにあったバレエの性格を、文化的・社会的背景を交えて多角的に読み解き、彼の来日以前での諸実践との関係性を検討することで、ローシーによって日本で展開されたバレエの実態と特徴を考察する。これまで、「バレエ正統史」を尺度にして論じられたため、見過ごされてきたローシー由来のバレエのありようを描き出すとともに、その意義について再評価を試みることを本研究の最終的な課題とする。本研究においては、イタリア、英国、日本、アメリカでローシーが上演活動に関わった作品の台本、プログラム、筋書、番組、写真、当時の新聞・雑誌記事、関係者の書簡や著作、手記などにみられる言説を一次資料として考察を進める。

第 1 章および第 2 章では、舞踊家ローシーをかたちづくったイタリアと英国ロンドンでの活動に着目し、これまで曖昧だった彼の訓練歴と出演歴を史資料から可能な限り明らかにした。バレエ技法とマイム技法の調和を求めるイタリアのバレエ教育の特色と、19 世紀末イタリアの象徴的作品「バッロ・グランデ」にみられる特徴を導出し、それがローシーらイタリア人舞踊家の活動によって世界各地へ伝播していたことを指摘した。また、そのイタリアの影響を大いに受けた英国ロンドンのヴァリエティ劇場におけるバレエについて、ローシーの関わりを中心に検討し、“up-to-date”という当時のロンドンの社会や観客層の多様化に呼応した異種雑多なレパートリーと、ダンサーたちのジャンル横断的な上演活動の様相を明らかにした。

第 3 章では、ローシー以前の日本における西欧由来の上演舞踊が、主に洋行経験のある知識人たちと、

彼らが記した文字による情報によってのみ断片的に受容されていたことを確認した。また、ローシー日本滞在中の主な拠点となる帝劇について、その異種混淆性を指摘した。

第4章では、これまで史実的根拠が必ずしも十分ではなかったローシー日本滞在中約5年半の活動の軌跡を時系列に整理し、上演作品、公演日時・場所、ローシー関与の実際を一次資料によって裏付け、ローシーの帝劇やローヤル館を中心とする多彩な上演活動を明らかにした。

また第5章では、その中から主にローシーの舞踊を中心とした活動に焦点をあて、バレエ指導の実際と舞踊作品の内容を明らかにし、ローシーをかたちづくっていた西欧のバレエが、直接または改良を加えられながら移入されていくさまを確認した。

第6章では、離日後のローシー本人と元教え子たちそれぞれの活動を追い、ローシー由来のバレエの多様な継承の様相を明らかにした。

以上の考察から、結論として以下のことがいえる。

ローシーが来日前の活動を通して体得したバレエは、18世紀のバレエ・ダクシオンを独自のかたちで継承したイタリア派のバレエと、そのイタリアバレエの影響を大いに受けつつ、19-20世紀転換期の時代性・社会性を反映させた英国ヴァリエティ劇場の多様性に富んだバレエの双方の特徴を合わせもったものであった。イタリアや英国で活躍したダンサーや振付家たちは、異種雑多な題材を様々なスタイルのダンスとマイムで演じるために、「正統なバレエの技法や表現法」に限らない多様なスキルを身につけ、上演ジャンルの枠を超えたボーダークロッシングな活動を展開するにいたった。そうしたローシーら舞踊家の多彩な活動は、当時の西欧におけるバレエやダンサーを取り巻く文化状況の一面を描き出している。

ローシーが大正期日本において試みた上演活動、すなわち、スペクタクル要素を含んだ種々雑多でジャンルを超越した作品の上演と、バレエの専門的技法とマイム表現法双方の習得を重んじる指導実践は、まさに彼が来日前に身につけたバレエ観に裏付けされたものであった。ローシーは、イタリア派のバレエの流れを汲んだヴァリエティ劇場流のバレエを、帝劇やローヤル館における活動、ひいては自身の生涯に渡る舞踊活動を通じて体現し続けた。ローシーの指導や上演活動を通して、帝劇歌劇部員らをはじめとする教え子たちはバレエ、ダンス、マイム、歌劇、喜歌劇とジャンル横断的な能力を身につけ、その多くは舞踊家、オペラ歌手などの音楽家、演劇・映画人として幅広く活躍した。日本初のバレエ教師といわれるローシーが自らの経験を通して体得した多様性に富んだバレエは、フランスやロシアにおける「正統的バレエ」とは、その技法や演出法、作品のあり方だけではなく、支持層、社会的・経済的・文化的文脈においても異なる仕方で欧州に確かに存在した。それは、ローシーによってバレエ不在の地であった日本に移入され、その薫陶を受けた多種多彩な舞台人たちの活動によって継承された。ローシーの影響は、石井漠や高田雅夫・せい子夫妻、小森敏といった日本モダンダンス、あるいは洋舞に留まらずに邦舞、そして音楽や演劇、映画と、高級文化から大衆文化にいたるまで広範に渡り、まさに大正期以降日本における多様な舞台文化の勃興を導いた。ローシーがもたらしたバレエという多元的な劇場文化は、続く近代日本の舞踊、音楽、演劇、映画など、広く上演芸術・芸能一般の揺籃となったものとして、その意義を再評価できよう。